

## 【主題】対話と広がり重視した美術教育の実践

### 【副題】～学び支援教室ほっとルームの活動を通して～

【学校・団体名】大河原町立大河原中学校

【役職名・氏名】教頭・鈴木雅之

#### 1 はじめに

本研究は、校内の学び支援教室で行う美術の授業を通して、対話と広がり重視した美術教育を実践するものである。対象は、不登校や登校に不安を抱える生徒であり、彼らが自信を回復し、自己理解を深め、他者と関わる力を高めることを目標とする。また、美術を愛好する心情を育み、感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばすとともに、美術文化への理解を深め、豊かな情操を養うことも目指している。

宮城県教育委員会では、不登校や登校に不安を抱える児童生徒を対象に、校内に「学び支援教室」を設置し、学習と自立の支援を提供する事業を行っている。令和7年度には、26市町で40校が実施校として含まれており、現任校も実施校となっている。現任校である大河原町立大河原中学校は管内一の規模を誇る大規模校である。生徒は明るく素直で、学校全体が落ち着きと活気を兼ね備えている。しかしその一方で、不登校や別室での登校を行う生徒も多く、その対応の一つとしてまなび支援教室「ほっとルーム」を開設している。

「ほっとルーム」には専任の担任教師、学習補助の支援員が在中し、教育課程、時間割に関しても柔軟に設定することが可能である。ほっとルームには令和7年4月当初は常時7名ほどの生徒が登校している。自信回復や自己理解の促進、他者との関わりを力の向上等を目指し活動を行っており、教室開設前より生徒の居場所が作られ徐々に効果を上げている。しかし、現在も多くの不登校生徒、事情を抱えた生徒、配慮を要する生徒は存在するため、さらに効果的な対応を行う必要がある。そのため本研究を行い研究目標の実現を目指す。

#### 2 研究仮説

**仮説1** 美術の授業数を増やし、個別の対話と広がりを重視した授業を行うことにより、生徒が自信回復や自己理解を促進し、意欲的に授業に向かうことができるのではないか。

**仮説2** 作品の展示を行うギャラリーの設置や展覧会

に出品し、交流を深めることで他者とのコミュニケーション力を向上させることができるのではないか。

#### 3 研究の方法

豊かな情操を養い、対話と広がり重視した美術教育を行う研究方法として、個別の支援を徹底し、生徒の気持ちに寄り添っていくためにいくつかの手立てを講じた。手立ては以下の3点である。

- (1) 週3時間の美術の授業を設定し、個別の支援を充実し様々な方法の対話を深める授業の実践
- (2) 制作と対話による鑑賞の横断的な授業の展開から自分の思いを表現する力の育成。
- (3) 作品を展示し、対話の中から更なるフィードバック、外部との交流に繋げるギャラリーS(さくら)の運営

#### 4 研究内容

(1) 週3時間の美術の授業を設定し、個別の支援を充実し様々な方法の対話を深める授業の実践

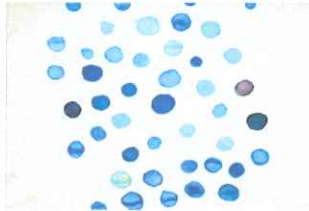


図①制作の様子

学び支援教室では宮城県教育委員会の学び支援事業に基づき校内支援体制を策定しており、教育課程、時間割等は生徒の実態に合わせ柔軟

に設定している。本校では令和7年度の美術の授業を週3時間とした。基本的に月、火、水に続けて美術が1時間ずつ設定され、本来の時間の3倍の時間授業を行うことができるようになっている。さらに学び支援教室では全ての授業に授業者に加え学習補助の支援員が1名つくことになっており、個別に丁寧に時間をかけて指導に当たることができるようになっている。取り組む授業題材・内容は他の普通学級の題材と同様のものとしている。従来であれば、なかなか制作をスムーズに進めることが難しい生徒が多かったが、個別の対話に時間をかけ、生徒の思いを受け止めながら時間をかけて作品を制作していくことで、(図①)優れた作品が数多く完成した。

**事例1 生徒A** 生徒Aは話すことも描くことも苦手で「身近なものを描く」の題材では最初の1時間では鉛筆で○の形を3つ描くことがやっとであった。それが時間をかけ対話を行い、描画材や描画方法を変えていくことで、意欲的に作業を進めていくようになった。図②は透明水彩を用いて無数のビー玉を描いた



図②透明水彩で描いたビー玉



図③ 画用紙全体をを黒くする



図③ 図②で黒くした画用紙に消しゴムでビー玉を描いていくものである。にじみの効果に面白さを感じ、様々な工夫を用いて作品を仕上げた。さらに次の作品では鉛筆のみの描画で初めは画面を真っ黒に塗りつぶし(図②),そこから消しゴムで白い線を描き作品を制作した(図③)。長い時間をかけた対話の中から彼女自身が見つけた技法である。



図④ 生徒B最初の作品



⑤ 生徒B 2番目の作品

ダイナミックに描く作風だったが(図④),周りからの影響から緻密な作風に変化していった(図⑤)。

### 事例2 生徒B

生徒Bは描くことは苦手で、これまでに意欲的に美術に取り組むことは少なかったがほっとルームで級友達が次々に作品制作に打ち込む姿に刺激を受け、作品制作に取り組むようになった。初めは図

荒々しいタッチでダ

### 事例3 生徒C

生徒Cは3年生である。4月までは保健室の登校だったが、美術の授業に興味を持ちほっとルームに通うようになった。もともとに持っていた優れた描写力を生



図⑥ 完成作品1「あい」



図⑦ 完成作品2「トキメキ」

かし、花をテーマに描き始めた。題材は自我像(心の像)である。自分の意志をはっきりと持っていた彼女は作品の中にメッセージを持たせ制作した。週3時間の授業から2作品を完成させ(図⑥図⑦),自分の心と向き合うことができた。

### 事例4 生徒D・F・F・G

その他の生徒の作品も個別に対話を続け、それぞれ自分に合った技法を選択し制作を行っている生徒Dは色鉛筆を用い、立体感のある筆記用具を描き(図⑧),生徒Eはマスキングテープでマチエールの迫力ある作品を



図⑧ 生徒D完成作品



図⑨ 生徒E完成作品



図⑩ 生徒F完成作品



図⑪ 生徒G完成作品

制作し(図⑨),生徒Fはポスターカラーで構図を工夫し、丁寧に細部を描写した風景画を描いた(図⑩)。また、生徒Gはデッサン力に優れた力を発揮し立体感のあるデッサンを丁寧な描写で完成させた(図⑪)。「身近なものを描く」「風景」「心の像」と通常学級と統一した題材になるが、描画材、制作方法とも対話の中から生徒自身が選択し、工夫して制作を行い、豊かな発想のある優れた作品が完成した。

(2) 制作と対話による鑑賞の横断的な授業の展開から自分の思いを表現しやすい環境を作る。



図12 吉原治良「風景」

個別の支援を行って  
いく上でも教師と生徒、  
生徒同士の対話が大切に  
なってくる。制作をより  
よいものにするためにも

鑑賞の時間を大切にする  
こととし、定期的に「対話による鑑賞」の授業を組み  
込んだ。「対話による鑑賞」は絵の知識を学習するとい  
うよりも、作品を見て感じる多様な見方・感じ方を尊  
重する鑑賞法で自分と他者の感性や解釈の違いを知り、  
価値観を広げるもので、作品理解や自己表現を深める  
点にある。この鑑賞法を使い、宮城県美術館のレプリ  
カ作品、吉原治良の「風景」で授業を行った(図12)。  
作品の参加者は生徒だけでなく、支援員や、授業を見  
に来た他教科の先生や養護教諭など多くの方に参加し  
て対話を行った。参加者それぞれが「ネバーランドの  
よう」「船は空に浮かんでるよう」「何かの墓場？」な  
ど思ったことを自由に発言して意見交換を行った。感  
想から、生徒自身が楽しみながら自己表現やコミュニ  
ケーション力が向上している様子を読み取ることがで  
きた。

### (3) 作品を展示し、対話の中から更なるフィードバック、外部との交流に繋げるギャラリーS(さくら)の運営



図13 ギャラリーSポスター

図14 ギャラリーS, 全景



図15 コメントカード1

図16 ギャラリーS展示の様子

完成した作品の代表作をほつとルーム前の廊下、壁  
面に展示した(図13図14)。他と違う空間を伝えるため  
に色紙の台紙やポスターを制作し、学び支援生徒と共  
に設営を行った。展示作品には図15図16にあるように  
全てコメントカード入れをつけ、鑑賞者がいつでもコ  
メントを書けるようにした。コメントカードは学内の

生徒・教師が記入するだけでなく、来客等外部の方々  
にも記入していただき、コメントカードが作者と他者  
の相互鑑賞の場となるように進めていった。

さらに作品を展示することで他学年の生徒や他教科  
の教師、来校者から授業内容について質問や意見をも  
らう機会が増えた。そこから対話が始まり、美術の授  
業以外の場面で生徒は対話による鑑賞を行い、ほつと  
ルームの担当教員以外とも積極的に交流が持てるよう  
になった。生徒達は図書館司書、特別支援担当者教諭  
など、スクールボランティアの方など日常の様々な場  
面で相互鑑賞を行っている



図17 昆虫展出品作品



図18 大河原町町昆虫展会場の様子

さらに完成した作品を積極的に外部の展覧会に出品し、  
交流に努めた。令和7年度は大河原中央公民館主催の  
昆虫の絵コンクールに出品し、多数の作品が受賞する  
ことができた(図17図18)。また、展覧会での発表から  
学校外との交流もとれるようになった。

## 5 結果と考察

(1) 仮説1 美術の授業数を増やし、個別の対話と  
広がり重視した授業を行うことにより、生徒が自信  
回復や自己理解を促進し、意欲的に授業に向かうこと  
ができるのではないか。

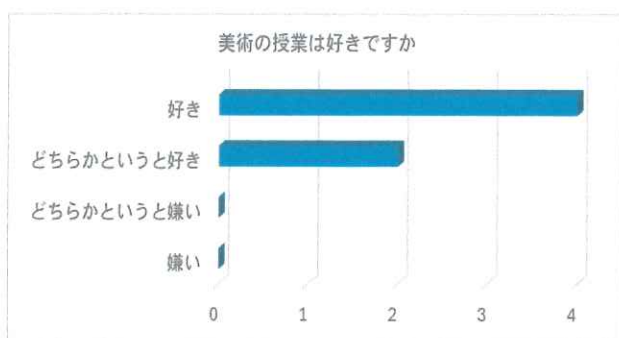
美術の授業数を増やし生徒と対話を繰り返しながら  
作品制作を続けることで様々な変化が生まれた。対話  
を通し、その生徒にあった技法を自ら選択し、時間  
をかけ制作を行うことで、作品の密度や表現が工夫さ  
れたものになったことはもちろんだが、それ以上に生  
徒が作品を通じた会話の中で自己を分析し、自信を持  
って表現を行うことができるようになった。生徒は全  
ての生徒が話すことが得意なわけではなくどちらか  
と言えば苦手な生徒が多いが、多くの時間の中で言葉  
以外の絵を通しての意見交換や、ジェスチャーなどで  
やりとりすることで、結果生徒の考えに迫ることが  
できた。

(2) 仮説2 作品の展示を行うギャラリーの設置や、  
展覧会に出品し、交流を深めることで他者とのコ  
ミュニケーション力を向上させることができるのでは  
ないか。

対話による直接の交流と、作品鑑賞カードを通じた間接的な交流の二面でコミュニケーション力の向上が見られた。

教室前廊下ギャラリーに作品を掲示したことで、生徒や先生方、来校者の方々など様々な鑑賞者が訪れることになった。特に普段ほっとルームの授業のない他教科の先生方や、図書館司書の先生、スクールサポートの先生、特別支援担当の先生方などたくさんの方々が見学に来られ、カードに記入したり、直接生徒と交流を行うようになった。さらに制作途中の教室にも訪れてもらえるようになり、自然に会話が弾むようになっていった。もともといる担当教師と支援員だけでなく様々な考えの先生達と対話を行うことで、生徒のコミュニケーション力も徐々に向上してきている。

### (3) 生徒アンケートの結果から



表① アンケート結果

2025年7月にとった生徒のアンケートの結果、生徒が研究の結果、美術に対して前向きな思いを持っていることがわかった。アンケートは6名が回答し100%の生徒が美術を「好き」「どちらかという好き」と答えている。

#### 生徒の感想 (夏休み前アンケートから)

- ・たくさんの言葉をわいわい話しているのが楽しかった。
- ・自分にこんな力があるのかと思った。
- ・花の絵を描くのが楽しかったです。どれもきれいにできてお気に入りです。
- ・先生が面白く優しいので楽しかったです。毎日美術があったらいいのと思っています。
- ・楽しかった。

#### 先生方の感想 (対話による鑑賞の感想から)

- ・こんな授業は初めてで、話せる人も声を出せない人も心の参加はみんなそれぞれにできて、ほっとルームにぴったりでした。
- ・生徒は終始笑っていて楽しそうで、そして学べる美

術の授業はきっと記憶に残るだろうと思いました。

### 6 終わりに

学習指導要領の各教科等の指導において、思考力、判断力、表現力等を育成する観点から、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることに配慮することが求められている。国語に限らず様々な教科、美術においても作文や話し合い活動など、様々な言語活動が多く授業で取り入れられている。一方思いを上手く伝え、話すことを苦手としている生徒も存在する。文で表すことを苦手としている生徒もいる。本校ほっとルームに在籍する生徒にも少なからずそういう生徒は存在している。本研究では美術教育において、対話を重視する研究ではあるが、必ずしも言語化しなければならない目標があるわけではなく、絵を通しての発表でもよし、発言しなくてもよし、その生徒の特性に合った思いの表現方法に沿って意思の疎通を行った。生徒はそれぞれの方法の中から授業に取り組み、表現し、結果、自信回復や自己理解の促進、他者との関わりの力を向上させていった。現在ほっとルームの生徒達は身につけた自信を元に新たな題材への制作に意欲を持って取り組んでいる。また、ギャラリーに展示した作品から広がった関係から、交流の幅を広げ、他者との力向上させている。

本研究の対象生徒は学びの支援教室の生徒達であるが、普通教室に通う生徒も学び支援教室に通う生徒も大きな違いはなく、本研究の成果はそのまま普通学級に通う全ての生徒にも効果があると考えられる。美術の授業を通して自分なり答えを見つけ、その良さを他者と共有しながら、より良い答えを導き出す力を身に付けた生徒が、さらに様々な教科、場面で力を発揮し新たな世界を創造していくことを期待し、今後も研究を継続したい。

### 7 参考文献

- ・「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策」(COCOLOプラン)  
令和5年3月31日 文部科学省
- ・「学校以外で学ぶ児童生徒を支援するための連携に関するガイドライン」  
令和5年3月 宮城県教育委員会
- ・「風神雷神はなぜ笑っているのか (対話による鑑賞完全講座)」 上野行一著 光村図書